ウェルカム・サンデー説教（2023 年７月 16 日）

説教者：中村信哉

狭い門から入りなさい

マタイの福音書７章 13-14 節

はじめに

私がウェルカム・サンデーで説教をする時は、イエス様が山の上で弟子たちや群衆に向けて語った説教、いわゆる「山上の説教」からお話しています。この山上の説教は、マタイの福音書 5-7 章に書かれています。今日の聖書箇所７：13 以下は、この山上の説教の結論部分となります。

７：13-27 には、三つのたとえ話が書かれています。一つは、今日の聖書箇所の「門と道」のたとえ話、二つ目は、15-23 の「木と実」のたとえ話、三つ目は、「家と土台」のたとえ話です。この三つのたとえ話に共通するのが、二つのものが対比されていることです。一つ目のたとえ話は、「狭い門」と「大きい門」が対比されています。二つ目のたとえ話は、「良い実を結ぶ木」と「悪い実を結ぶ木」が対比されています。そして三つ目のたとえ話は、「岩の上に家を建てた賢い人」と「砂の上に建てた愚かな人」です。

イエス様は、山上の説教の結論として、たとえ話を用いて、二つの生き方を提示します。そして、「どちらか選びなさい」と私たちに決断を求めているのです。つまり、「狭い門」から入るのか、それとも「大きい門」から入るのか「どちらか選びなさい」。また「良い実を結ぶ木」なのか、それとも「悪い実を結ぶ木」なのか、「どちらか見分けなさい」。そして「岩の上に家を建てた賢い人」になりたいのか、それとも「砂の上に家を建てた愚かな人」になりたいのか、「どちらか選びなさい」と言われるのです。

イエス様は私たちに、ただ御自身の話を聞くだけでなく、聞いた上で、これからどのように生きていくのか、どの生き方を選び取っていくのか、その決断を求められるのです。

1. 狭い門と細い道

今日の聖書箇所に出てくるのは、「狭い門」と「大きい門」です。イエス様は、この二つの門を提示して、「どちらか選びなさい」というより、「狭い門から入りなさい」と明確に、私たちが進むべき道を指示しておられます。

「狭き門」という言葉は、私たちはよく耳にします。例えば、受験とか入社試験とか、何かのオーディションなど、入れる人がわずかな場合、「狭き門」と言います。その場合、その「狭き門」に多くの人が入ろうとするので、結果的に、門が狭くなるのです。

しかしイエス様が言われた「狭い門」は、多くの人が入ろうとするわけではないのです。多くの人は、「狭い門」ではなく、「広い門」から入ろうとするのです。「狭い門」から入ろうとする人は、「わずか」しかいないと言われます。なぜなら、「見出す」人が少な

いからです。イエス様が言われた「狭い門」は、探すのが難しいのです。なかなか見つけられないほど、また人々が見落としてしまうほど、「狭く」「小さな」門なのです。

では、このイエス様が言われた「狭い門」とは、具体的にどのようなものなのでしょうか。イエス様はここで、「狭い門」だけでなく、「狭い門」から入った先には「細い道」があると言われます。イエス様が言われた、この「狭い門と細い道」は、「いのちに至る」門であり、「いのちに至る」道です。イエス様は、ヨハネ 14：6 でこのように言われました。**「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」**。また、ヨハネ 10：9 でこうも言われました。**「わたしは門です。だれでも、わたしを通って入るなら救われます」**。「狭い門と細い道」とは、イエス様のことです。イエス様という「門」から入って、イエス様という「道」を通っていけば、必ず「いのちに至る」と言われるのです。「いのち」とは、「救われる」ことであり、「父のみもとに行くこと」です。神の子であるイエス様にとって、「父」とは天におられる神様のことです。ですから、「いのち」とは、罪と裁きから救われ、神様がおられる天国に行くことです。イエス様を信じて、イエス様の教えに従って人生を歩んでいけば、必ず罪と裁きから救われ、神様がおられる天国に行くことができるのです。ですから、イエス様が「狭い門から入りなさい」と言われたのは、「わたしを信じ、わたしに従って生きなさい」という意味なのです。

しかし、イエス様によれば、イエス様を信じ、従って生きる人は、「わずか」しかいません。その理由の一つは、その道が「細い」からです。ここでの「細い」という言葉は、ギリシヤ語の「スリボー」という言葉が使われていますが、これは「圧迫する」「苦しめる」「悩ます」という意味の言葉です。聖書では、しばしば「苦難」と訳されます。つまり、イエス様を信じ、従って生きる道には、苦難があるというのです。なぜ苦難があるのかというと、この道を歩む人が「わずか」だからです。多くの人は「大きな門」から入り、「広い道」を歩んでいくのです。ですから、「狭い門」から入り、「細い道」を歩んでいく人は、世間の多くの人と違う生き方をしなければならないのです。そこから来る「苦しみ」「悩み」、心が締め付けられるような心の「圧迫」を経験するのです。迫害されることもあるでしょう。馬鹿にされることもあるでしょう。時には親しい家族や友人と対立しなければならないこともあるでしょう。そういう意味での「苦難」が、イエス様を信じ、従っていく「細い道」にはあるのです。

しかし教会は、できるだけ多くの人に、イエス様を信じ、従って生きてほしいと願います。そのため、ある教会は「門」を「広く」しようとします。できるだけ「入口」を広げようとします。イエス様を信じれば、苦しみから解放されて、悩みもなくなりますとか、よく分からなくても、とにかく信じればよいのですとか、イエス様を信じても、礼拝は来れる時に来ればよいですとか、献金はしてもしなくてもよいですとか、奉仕はできる時だけすればよいですとか。とにかくイエス様を信じる「門」を「広く」して、そのうちその人も変わって、「細い道」に歩むようになるだろうと考えます。しかし、イエス様によれ

ば、「広い門」から入った人は、「広い道」を歩んでいくのです。「広い門」から入った人が、「細い道」を歩むことはあり得ないのです。「狭い門」から入った人だけが、「細い道」を歩み、「いのち」に至るのです。

「狭い門」から入るとは、これから世間の多くの人と違う生き方をしていくということです。「狭い門」から入れば、その先は「細い道」が続いていくからです。ですから「狭い門」から入るには、明確な決断が必要なのです。勢いに任せて、ただ何となくではなく、じっくりよく考えて決断する必要があるのです。それは、「いのち」に至るか、「滅び」に至るかの重大な決断だからです。またその「狭い門」を入った後には、「細い道」が続いていくからです。

「狭い門」から入って行くには、多くの荷物を抱えては入れません。できるだけシンプルに、着の身着のまま入らなければなりません。「狭い門」から入って行くには、やはりその「門」の前に置いていかなければならないもの、捨てなければならないものがあるのです。それは何でしょうか。

2. 大きい門と広い道

「狭い門」から入り、「細い道」を歩んでいくというのは、イエス様を信じ、イエス様に従って生きていくことです。そうすれば必ず「いのち」に至るのです。では、「大きい門」から入り、「広い道」を歩んでいくとはどういうことでしょうか。それは、イエス様を信じ、イエス様に従って生きていくこととは、正反対の生き方です。それは、イエス様を否定し、イエス様に従わずに生きていくことです。イエス様が私たちに求めていることは、神様を愛し、人を愛していくことです。そうであるならば、イエス様を否定し、イエス様に従わずに生きていくこととは、神様を愛さず、人を愛さず、ただ自分だけを愛して生きていくことです。自分の欲望に従い、自分のやりたいことをして、自分のやりたくないことはせずに、ただ自己実現のために生きていくことです。これが、「大きい門」から入り、「広い道」を歩んでいくということであり、世間の多くの人の生き方です。自分を中心に人生を考えていく生き方です。自分の利益を考えて、自己実現のために生きていく生き方です。では、このような生き方は、結局どこに至るのでしょうか。イエス様によれば、それは「滅び」です。つまり、神様に裁かれ、神様に捨てられ、地獄へと投げ入れられるのです。

イエス様は私たちに、二つの生き方を提示しています。一つは、「狭い門」から入り、「細い道」を通って、「いのち」に至る生き方です。この生き方をする人は、「わずか」です。もう一つは、「大きい門」から入り、「広い道」を通って、「滅び」に至る生き方です。多くの人が、この生き方をします。私たち人間には、究極的には、この二つの生き方しかないのです。言い換えれば、イエス様を信じて、イエス様に従って生きて、「いのち」に至るか、それとも、イエス様を否定して、自分の欲望に従って生きて、「滅び」に至るかです。さらに言い換えるなら、イエス様を中心に生きて「いのち」に至るか、それ

とも自分を中心に生きて、「滅び」に至るか、です。私たち人間には、究極的には、この二つの生き方しかないのです。私たちは、この二つのどちらを選ぶかを、決断しなければならないのです。

「狭い門」から入るには、私たちには「門」の前に置いていかなければならないもの、捨てなければならないものがあります。それは、「自分」というものです。イエス様はある時、こう言われました。**「だれでもわたしに従って来たければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」(マルコ 8:34)**。私たちは、「狭い門」から入る時、これからの人生を、自分を中心にして生きていくのか、それともイエス様を中心に生きていくのかを、明確に決断しなければならないのです。

3. <u>イエスの生涯</u>

私たちはなぜ、イエス様を信じ、イエス様に従っていかなければならないのでしょうか。なぜイエス様を信じ、イエス様に従って生きていく時に「いのち」に至るのでしょうか。それは、イエス様こそ、この世界と私たち人間を造られた、全知全能の真の神であるからです。またイエス様こそ、真の神でありながら、私たち人間の罪を償うために十字架で死なれ、私たちに「救い」と「いのち」を与えられた方だからです。私たち人間の罪というのは、必ずしも犯罪に限りません。神様を愛さないこと、隣人を愛さないことこそ、神様の前では「罪」なのです。つまり、神様に背いて、自分だけを愛して、自分を中心に生きることが、神様の前では「罪」なのです。そして、その罪の結果が、「滅び」であり「地獄」なのです。

私たちは誰でも自己中心です。その性質は、生涯の最後まで完全に消えることはありません。しかしそれでも、「救われたい」「いのち」を得たいと願うなら、真の神であり、私たちのために十字架で死なれた救い主であるイエス様を信じ、従っていく決断をしてみませんか？「大きな門」から入り、「広い道」を歩んでいくのではなく、「狭い門」から入り、「細い道」を歩んでいきませんか？

<u>おわりに</u>

イエス様は、「狭い門」から入り、「細い道」を歩み、「いのち」を獲得されました。「狭い門」に入る前に、「神としてのあり方」を捨てて、人となられました。そして、馬小屋で生まれ、二歳になる頃には命を狙われ、エジプトに身を隠されました。宣教活動を始められてからは、ユダヤ人の宗教指導者たちに妬まれ、十字架で殺されました。イエス様の生涯は、まさに「細い道」でした。しかしイエス様は、十字架の死の後、三日目に死からよみがえり、私たちのために「いのち」を獲得されました。イエス様はまさに、「狭い門」から入り、「細い道」を歩み、「いのち」に至ったのです。

「狭い門」から入り、「細い道」を歩む生き方は、確かに苦難があります。しかし、その道には、イエス様が共におられ、私たちを「いのち」へと導いてくださるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

イエス様は私たちに、二つの生き方を提示されました。それは、真の神であり、救い主であるイエス様を中心に生きて「いのち」に至る道と、自分を中心に生きて「滅び」に至る道です。私たちは、「狭い門」と「大きな門」の前に立たされています。私たちは、自分を捨てて「狭い門」を行くのか、それとも自分を抱えて「広い門」を行くのか、どちらかを選ばなければなりません。私たちは、この二つの「門」がどこに至るのかをよく考えて、決断しなければなりません。私たちが、「狭い門から入りなさい」というイエス様の御声に聞き従うことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。